



TITLE:

たより

AUTHOR(S):

萑部

---

CITATION:

萑部. たより. 天界 1934, 14(159): 357-357

ISSUE DATE:

1934-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165545>

RIGHT:

月 4日は船中で全く姿を現はさなかつた！ 波は、やはり、極めて静か。

八月 6日は日曜で、11時から一等 パールで Thomas 宣教師の主裁する禮拜があつた。翌 7 日、横濱着の日を英子に電報す。午後、Jeans の New Background を読む。8 日、いよいよ横濱へ近づいたので、入港通關等に関する手続き用紙が配布された。此の夜、久しぶりに空が晴れて、星が見える。

八月 9 日、早朝鯨や海豚等が見えた。10日は荷作り、其の夕暮れ、船の右舷に船が見え、又、陸が見えた。鹿島沖か？ 犬吠崎らしいものも見え、夜中、四圍は、にぎやかであつた。波は静か、此の全航海は、『まるで Ferry みたいだ』といふ評判。

八月11日早暁、船は濃い霧をついて横濱港外に入り、検疫や入港手續の後、8時、岸壁に着き、英子に出迎へられ、ホテル・ニウグランドに入つた。午後、東京へ行き、平山信博士に歸朝の挨拶を述べ、土居、五藤、佐藤諸氏に御目にかゝつた。

翌12日13時に横濱發、21時40分京都に歸宅。（終）

## た よ り

山本先生机下

拜呈（前略）

去る16日上野博物館の20櫛で二三の天體を觀ました。デフラクションも試して見ました。17日の夕には清水眞一氏を訪れ、寫眞裝置苦心の跡を拜見致しました。18日夕、木邊氏の御庭の30櫛反射鏡を拜見、Mounting に関する御説を承りました。歸途、山科のあたり、列車の窓から山の頂きに灯影を認め、大分心が動きましたが、遅いので、宅へと急ぎました。以上は公用旅行の夜間敷刻宛を利用致した譯であります。（中略）私共は何處迄も先生の御役に立ち度いと念願致して居ます。

奥様よろしく御傳聲下さいませ 敬具

昭和九年五月十九日

神戸 荏 部 生